

春の訪れ（梅の花と桜の花）

「1月は住（い）ぬる、2月は逃（に）げる、3月は去（さ）る」と言われます。年が明けてから年度替わりまで、正月や進入学、就職などに関連するイベントなどが多く行われるためか、この3か月はあっという間に過ぎ去るさまを言葉遊び的に言い表したものです。寒冷的な冬の静的で色の無い世界から、温暖な春の動的で色鮮やかな世界へと一気に移行する時期でもあります。そして季節を彩り春の到来を告げるのが梅の花であり桜の花です。

2月。立春が過ぎ、まだまだ寒い日が続いていても、梅の花がほころび始めると、もう春だな、と気持ちが高ぶってきます。江戸端唄に言う「梅は咲いたか、桜はまだかいな」の心境でしょうか。この時期飯田龍太の有名な句（※）にあるような白梅や紅梅が青空の下に鮮やかに咲いている情景は、早春の清々しい美しさを感じさせます。

そして讃岐路に本格的な春が到来する3月末から4月上旬。いよいよ真打ち、桜（ソメイヨシノ）の登場です。「春の訪れを感じる瞬間」はどんな時か、という類のアンケート調査では、必ず「桜の開花」が1位か2位の最上位に位置しています。それだけ春といえば桜という意識が定着しているのでしょう。

ところで、梅にまつわる話では、讃岐の国司もした菅原道真が大宰府に左遷された時に詠んだ「東風（こち）吹かば 匂い起こせよ梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ」という歌と、その梅が京から一晩にして道真の住む屋敷の庭に飛んできたという「飛梅」の故事が有名です。梅の花言葉は高潔、忠実、忍耐ですが、ぴったりと当てはまる話だと思います。面白いのは、道真は同時に桜に対しても歌を詠んでいるということです。でもこちらはあまり一般には知られていません。また、梅と違って桜の方は、悲しみのあまり、みるみるうちに葉を落とし、ついには枯れてしまったという言い伝えになっています。勇ましい「飛梅」と真逆ですが、散って行く儂（はかな）さや潔さが日本人に好まれる桜の特長が現れている故事だと言えなくもありません。

4月になり、今度は年度始めの行事が多く、またまた忙しい日々が続きます。それでもせつかくの春爛漫（らんまん）の候。少しでも、花（桜）を愛でる余裕を持ち過ごしたいものです。

（※）「白梅のあと紅梅の深空あり」飯田 龍太